

■対談



◆梅田と千里山をつなぎ、起業の志を支援する

池内 並行して梅田キャンパスも開設します。都心にも人が交わる本学の拠点ができることを強みにしたいと考えています。

大坪 あれだけの人が集まる梅田という立地には、大いなるチャンスが内在していると思います。千里山のイノベーション創生センターと梅田キャンパス、それぞれの場所での交流から生まれたものを共有し、両方で発展させ、ひいては関西大学全体の将来の発展に繋げていただきたい。そのために、イノベーション創生センターと梅田キャンパスのネットワーク化はシナジー効果を生むために欠かせないでしょう。

池内 それをどのように実現するか、1年かけて細部にわたり考えていかなければならないと思っています。

大坪 関西大学がイノベーション創生センターを設立するからといって、簡単に企業が参入するかどうかという、それ程甘いものではありません。例えば、パナソニックでも日本の大学とだけコラボレーションをしているわけではありません。今や世界中の大学を対象に連携が広がっています。その中から選ばれることは生易しいものではないと思います。

関西大学がより多くの企業との連携を拡大するためには、中小企業にも目を向ける必要があると思います。幸いにも大阪には多くの中小事業者が活躍されている。そこに、関西大学のイノベーション創生センターのメリットを広く伝えていく必要があるのではないのでしょうか。

昨今、日本全体の企業数は減少しています。国の経済力を維持向上させるためには、やはり会社の数を増やさなければいけません。そういう意味でイノベーション創生センターには、起業を支援し、ベンチャー企業のスピーディな展開をサポートするという視点も必要だろうと思います。

池内 イノベーション創生センターでは、インキュベーション機能はもちろん、ベンチャー促進機能も充実させる計画です。さらに梅田キャンパスにも、起業をめざす人を対象とした学びの場としての機能も持たせたいと考えています。

梅田キャンパスを開設するにあたって売却した天六キャンパスでは、90年の歴史の中で多くの学生が昼間働きながら、夜間勉学に励んでいました。それだけ目的を持って勉強した学生の中からは、自分で事業を起こした人がたくさんいます。このような天六キャンパスの魂を梅田キャンパスでは引き継ぎたい。志のある起業家を輩出できたらと思っています。また、最近是在学中から起

ユニークな発想力で新たな産学官連携研究を創生

世界を変える、イノベーションを

関西大学イノベーション創生センター、誕生へ

大坪 文雄
・パナソニック株式会社 特別顧問

池内 啓三
理事長

2016年11月の関西大学創立130周年に向けて、記念事業も着々と進行中。中でも、産学官連携の共同研究拠点「関西大学イノベーション創生センター」の設立は、産業界からも大きな注目を集めている。同センターでは企業の研究部門等を誘致し、文系・理系の枠組みを超え、教員・学生・企業人の活発な対話・交流の中から革新的なイノベーションの創生を目指す。まさに、「学の実化」を具現化し、130周年のその先へと進む関西大学の道を切り拓く新拠点だ。今回は工学部卒業生でパナソニック特別顧問の大坪文雄氏を招き、同センターの可能性を中心に池内啓三理事長と意見交換を行った。

◆文理融合でイノベーションを生み出す

池内 大学創立130周年まで、いよいよあと1年となりました。千里山キャンパスの新たなアクセス・エリアの創出、人文・自然・社会科学系の枠組みを超えた産学官連携の共同研究拠点「イノベーション創生センター」と、「なにわ大阪研究センター」の設立、大阪市北区鶴野町における「梅田キャンパス」の開設、グローバル人材の育成をめざす「グローバルフロンティアプログラム(KUGF)」の開発・提供、「関西大学『学縁』給付奨学金制度」の構築、地域住民



関西大学イノベーション創生センター (完成イメージ)

■対談



大坪 文雄 (おおつぼ ふみお)
1945年大阪府生まれ。71年関西大学大学院工学研究科機械工学専攻修了。同年、松下電器産業株式会社入社。95年オーディオ事業部長、98年取締役、2000年常務取締役、03年代表取締役専務を歴任し、06年代表取締役社長に就任。12年パナソニック株式会社代表取締役会長就任。13年特別顧問に就任、現在に至る。

大企業、中小企業、それぞれ抱えている問題は違います。異なる課題にうまく対応して、企業との施設の共用が進めば、バラエティーに富んだイノベーションが可能になると思います。

業する学生も結構います。そういった学生に対してもチャンスを与えたいですね。

大坪 学生の起業はアメリカでは、もうすっかり当たり前の話で、マイクロソフトのビル・ゲイツ氏にしろ、フェイスブックのマーク・ザッカーバーグ氏もハーバード大学を中退して、会社を起しています。最近では中国でも、そういった例が目立ってきました。やはり、日本においても、学生による起業が活発であることは重要です。起業の志を持った学生が関西大学にたくさんいるのは、頼もしいことだと思います。

学生に起業意欲があっても、学生同士だけで話していると、なかなか踏み切れないところもあるかもしれません。それが、社会人や異なる分野の人と出会うことで、背中をトンと押してもらえる可能性もあります。イノベーション創生センター、梅田キャンパスを学生達の情報収集・情報交換の場として利用してもらえようになれば、関西大学からの起業家がさらに増えるかもしれません。

◆若き力よ、恐れず、可能性の地へ飛び込め

池内 大坪さんには今年、本学学生2名を国際インターンシップとして、シンガポール現地法人への受け入れの橋渡しをしていただきましたね。

大坪 参加した学生には、アジア新興国市場の実態、アジアでのビジネスモデルを学んでもらいました。他国での就業体験はもちろん、その国の文化を学ぶことは、非常に貴重な経験だと感じています。希望を言えば、シンガポールのように環境的に恵まれた国だけではなく、これから間違いなく発展する国に、インターンシップで飛び込む学生が増えると、本物のグローバル化が進むのではないのでしょうか。

池内 日本を離れ、なぜわざわざ苦労しに行く必要があるのかと思う学生が多いと感じています。日本中が豊かさを求めていた時代とは違い、子どもの頃から平和で豊かさに囲まれていた彼らに対して、不便な環境に出向こうという意欲をかき立てるにはどうしたらいいのでしょうか。

大坪 これから発展する国は、今は貧しいかもしれない。しかし、日本だって学生達の祖父母の時代は、今のよう便利な家電製品などを知らない暮らしだった。多くの発展途上国がやがて、今の日本みたいな豊かな国になるのは間違いのないことです。これから発展する地域に自分の可能性を求める気概は、大いに意味があるということ認識すべきだと思います。

歴史に学べば、豊かさを手に入れた国の多くは衰退していきま。その理由はやはり、若者に挑戦心が無くなるからではないでしょうか。日本も若い人達が心地よい中に閉じこもってはいは、間違いなく衰退の一途をたどることになるでしょう。そうでなくても、日本は高齢者が増えているわけですから、若い人の相応な活力が必要になると思われます。

◆長寿企業・大学は、理念を尊び、強みを磨く

大坪 130年以上の歴史を持つ大学は、そう多くはないですね。企業の話をしめすと、100年以上の歴史を持つ長寿企業は、2014

年末で日本には2万7300社余りあると言われています。これは、世界の長寿企業の約半数になるそうです。島国であることも幸いしたとは思いますが、日本は長寿企業が世界的に抜きん出て多い国なのです。

では、100年200年と続く長寿企業は、どのような経営をしてきた会社なのか。多くの調査・分析結果がありますが、私が一番納得できたのは、創業の理念を大事に守っている会社であることです。それから、自社の強みをよく考え、その強みを着実に磨き上げてきた企業であることが共通しています。

大学に当てはめると、建学の精神を大事にしていること、大学としての強みを深く考え、磨き上げ、社会の環境変化に対応していく大学が長寿大学になるのだと思います。関西大学も建学の精神と大学の強みを自覚し、教職員、学生、卒業生、保護者が一つになって取り組んできたことで、130年という長い歴史を紡ぐことができたのだと思います。この歴史は非常に大きな財産です。ただそれに安住してしまうと、衰退のスピードも速いでしょう。これからも、建学の精神、大学としての強みを大切に、時代の変化に対応していくことを継続し、150年200年と続く歴史ある大学に発展していただきたい。我々も関西大学の卒業生として、少しでも社会に評価していただけるよう意識して頑張らなければならないと思います。

◆破壊と積み上げ、2種のイノベーション

大坪 イノベーションには2つのタイプがあると産業界では理解されています。1つは、技術的には可能であっても、今まで世の中に存在しなかったものが登場し、世の中をガラッと変えてしまう破壊的イノベーション。例えば、スマホなどがそうです。しかし、それが毎年出てくるかという点、なかなかそうはいかない。ですから、実際の企業経営では、今年リリースしたこの製品よりも、来年はもっとコンパクトにして、こんな機能を追加できるようにしようとイノベーションを繰り返していく。これを、積み上げ型イノベーションと私は勝手に命名しています。

1年ごとの進化は小さくても、10年後に振り返って見ると、かなり大きな変化が起きているはず。イノベーション創生センターも、世の中をあっと言わせる破壊的イノベーションは知の拠点としてももちろん狙わなければならないと思いますが、同時に企業が抱える問題を共同で解決し、より良いものを生み出す積み上げ型イノベーションを継続していただきたい。それが、イノベーション創生センターを本当に存在意義のあるものにしていくだろうと思います。

大企業、中小企業、それぞれ抱えている問題は違います。異なる課題にうまく対応して、企業との施設の共用が進めば、バラエティーに富んだイノベーションが可能になると思います。困ったことがあれば関西大学のイノベーション創生センターに行こうと、関西中の企業に思ってもらえたら、もう成功でしょうね。

池内 イノベーション創生センターも梅田キャンパスも10年、20年かけて成果を出していく事業です。「関西大学、面白いことを始めたな。一度足を運んでみよう」と思われるような拠点に育てていきたいと思っています。

インキュベーション機能はもちろん、ベンチャー促進機能も充実させる計画です。さらに梅田キャンパスにも、起業をめざす人を対象とした学びの場としての機能も持たせたいと考えています。



池内 啓三 (いけうち けいざう)
1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年理事長に就任。